

福島

個性を生かす空き家建築での試み ポジティブな福島をつくり発信

福島市飯坂温泉に昭和初期に建築された趣ある空き家がある。5月のある土曜、そこを改修して小さな図書館をつくるという計画図説明、打ち合わせに出向く。その折5月9日～6月3日の土日10日間にわたり、老朽化などにより昨年2月から休業中の温泉旅館で「清山飯坂芸術祭」が開催中だったので立ち寄った。

パッチワークの暖簾を掲げる門を潜り、エロチカルな女河童のいる小池を横目に玄関に入る。ロビーにはパッチワークの布が敷き詰められ、パッチワーク着物姿のスタッフが小走りを通る。その向こうの談話空間にいた顔見知りの笑顔に迎えられた。ここ清山は震災以降幾度も来る機会があり、縁の深い場所。芸術祭主催の「プロジェクトFUKUSHIMA!」は震災をきっかけに、福島県ゆかりのアーティストが中心となり結成されたNPO法人だ。

プロジェクトFUKUSHIMA!の象徴は「大風呂敷」。それは震災5カ月後の屋外音楽フェスティバル開催時に、放射性物質対策として6,000m²の巨大パッチワークを公園に敷き詰めたことに始まる。作成のため、多くのボランティアがミシンの前に並び布を縫った。それはやがて心の分断をつなごうとする祈りにもなった。「震災でネガティブになったフクシマを文化の力でポジティブに転換していく」というテーマを掲げ、それを含め「大風呂敷を広げた」としている。彼らは2013年から毎年、福島市中心街でオリジナル音楽での独自の盆踊りを開催。さらに「いまの福島を、そしてこれからの福島の姿を、全世界へ」を目的に、いまでは北海道、東京、愛知などで大風呂敷を広げ続け、季節にかかわらず各地で盆踊りを開催している。

代表の山岸清之進さん(44歳)は「手をつないで踊る盆踊り



図書館計画をすすめる空き家

が今の福島には必要だと思っている。しかし7年たって、これまでの音楽家中心の1日だけのフェスだけでなく、震災後をじっくり考えるときも必要だと感じている。そこで今回はアートから福島と向き合う芸術祭を企画した」と言う。会場の旅館清山は清之進さんの実家だ。

芸術祭会場は8,000m²の敷地に迷路のように広がる。その閑散とした休業旅館をキャンバスに、福島育ちの音楽家大友良英さん(58歳)ら、

県内外50組を超えるアーティストが挑む。それは客室など32室での展示、そして音楽ライブ、トークイベント、映画、演劇、ダンスショーと多岐にわたり、震災と原発事故からの復興を目指す県民の思いや姿を、芸術のエネルギーで伝えようとしている。どれも独創的で休業旅館という場を利用したアートだ。それらは「困難なときこそ前を見よう!」と語っているように感じた。旅館の浴場は足湯として開放されていた。

一方、図書館計画の空き家にも住宅ながら温泉が引かれている。敷地の一角には温泉で飯坂温泉名物ラジウム玉子(温泉玉子)をつくる作業場もある。小さな図書館の計画には、温泉を利用して足湯施設も盛り込んだ。本を読みながら足湯にも入れる。「ふれあいの広

場」や「サロン」など地域住民同士や観光客との交流の場になればいい…とオーナーが話す。

2つの試みは「空き家建築ごとの個性を生かして地域を元気に」というもの。これは空き家問題と地域活性化へのヒントの1つにならないか。さらにこれらの試みにより、ポジティブな福島をつくりそれを発信できれば、7年間応援してくれた人々、県外に離れた人々へのメッセージにもなる。建築のチカラでその後押しをしていきたいものだ。



(撮影:筆者)

「プロジェクトFUKUSHIMA!」



福島大風呂敷@四季の里(2011年)



FUKUSHIMA! 納涼!盆踊り(2015年)



清山飯坂芸術祭会場・旅館清山(2018年)

遠藤知世吉
えんどうちよよきよ
遠藤知世吉・建築設計工房